

所属・資格 英文学科・教授

申請者氏名 高橋 利明

研究課題	ホーソンと「幸運な墮落」のパラドックス	
研究目的 および 研究概要	<p>標記研究課題について、『大理石の牧神』を中心にその他の作品を含めて分析を進める。ミリアムによって主張される「幸運な墮落」という造悪論は、テキストでは二度拒絶される。まずは、ケニヨンにより、そして最後にはヒルダによって完全否定される。これを認めることは、キリスト教を棄教することと同義である。しかし、M.J. コラカチオが、D.H. ロレンスの『緋文字』論を引きながら、「テキスト自体はヘスターという存在を恐れている：女は疑り深い男の復讐の女神なのだ。女はそれを避けられない」と言うように、『大理石の牧神』のテキストもまた、ミリアムのパッションを恐れているのだ。そしてミリアムのパッションは、「疑り深い男」たちが作り上げたキリスト教自体を転覆するような力を胚胎している。最初から悪を意図した罪は論外であるが、モデルによって魂の隷属状態に置かれているミリアムを愛し、守ろうとするが故に犯したドナテロの罪には酌量の余地がない訳ではないのだ。モデルは、他者の魂を弄び汚すというホーソンの言う「許されざる罪」を犯しており、その意味では彼はラパチーニやエイルマーなどの狂気の科学者から、チリングワース、ピンチョン判事、ホリングズワース、ウエスタベルトなどの系譜に属するのだ。</p>	
報告の概要	研究結果	<p>ミリアムの「幸運な墮落」論をケニヨンは「あまりにも危険」とであると拒絶し、「計り知れぬ深淵」(“the unfathomable abysses”)に足を踏み入れていると彼女に忠告するのである。しかしながら、ケニヨンは最終章において愛するヒルダに対して、ミリアムの考えに強く影響を受けたかのように、罪によるドナテロの教育、また、罪による彼の向上が実際あり得たのではないか、という「当惑」(“perplexity”)の気持ちをヒルダに吐露している。そして、ケニヨンが、「アダムは、私たちが究極的に彼のそれよりはるかに高遠なるエデンにのぼれるように墮落したのではないのでしょうか」(“Did Adam fall, that we might ultimately rise to a far loftier Paradise than his?”)(460)と言う時、ヒルダは興奮して猛反発するのだ。ケニヨンはすぐに前言を撤回し、その余勢を駆ってヒルダに愛の告白をした結果、それは結婚の形で成就するのである。彼はピューリタンの「白き知恵」(“white wisdom”)(460)を持つヒルダを心底愛して止まないのであり、「幸運な墮落」のパラドックスという神学上の問題を内面化しながらも、自分にとってかけがえのない存在であるヒルダを手に入れたのだ。かくして、「幸運な墮落」の是非をめぐって、ヒルダ・ケニヨン組とミリアム・ドナテロ組は対立したままで終わる。しかし、その対立の両極性の緊張に耐えようとする作者ホーソンの想像力は、失われたエデンを求め、その「より高い無垢」(“a higher innocence”)をドナテロの中に見出したのだ。そして、ケニヨンの、また作者のドナテロの罪に対する〈共感〉は、モンテ・ベニでケニヨンの意識の中に想起された「憂いに沈んだ美の影」をもったエデンを発見したのであり、地上における「美」の相対性と人間の不完全性を再認識するのである。</p>
研究の考察・反省	<p>アメリカ娘のピューリタンであるヒルダが会おうヨーロッパ文化の圧倒的かつ神秘的な力は、最もよくミリアムに体现されている。イギリス人の母とイタリア人の父から生まれた娘、という「混血人種」(“mixed race”)(430)であり、かつ「ユダヤ人の血」(“Jewish blood”)(429)筋も入っている彼女は、まさにヘブライズムとヘレニズムの混淆の中に生きている全ヨーロッパの“mystery”そのものなのである。そして、「幸運な墮落」についての議論は、すでにアウグスティヌスによって肯定的に捉えられていたことを考えれば、全ヨーロッパの歴史を背負っているミリアムにその思想を受容する素地は十分にあったと思われる。カプチン僧のモデルによる迫害に耐えに耐えていたミリアムは、エデンを体现する無垢なる神話的自然児ドナテロによって救済されたのだが、その意味は、神話によるキリスト教の相対化、または自然(ネイチャー)による人工(アート)の相対化とも理解できるであろう。また、敷衍して言えば、ドナテロが体现するアニミズム的な「自然言語」は、ミリアムが体现するキリスト教的な「人間言語」を包摂する優位なものであると考え得るのである。しかし、地上を“a Paradise”に変える可能性を胚胎していたドナテロの“a genial nature”(459)は、失われて初めてその価値に光が当たるのだ。</p>	

<p>研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所</p> <p>研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者</p>	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>【研究発表】 International Poe and Hawthorne Conference “Hawthorne and the Paradox of the Fortunate Fall: Eden Found in <i>The Marble Faun</i>” 2018年6月23日/京都ガーデンパレスホテル</p> <p>【研究成果物】 喩としての毒——「ラパチャーニの娘」における「恐怖の共感」について—— 『研究紀要』 第97号 平成31年2月 日本大学文理学部人文科学研究所</p>
--	--